

大学附属幼稚園における保育の質を高めるための取り組み

— 子どもの遊びを活性化させるための素材活用 —

植草 一世^[1] 植草学園大学発達教育学部・植草学園大学附属美浜幼稚園

本研究は、大学附属幼稚園における「インクルーシブ保育」の実現のための素材の可能性を検証した。多様な素材によって、子ども達が遊びに参加しやすくなるという考えのもとに、様々な素材を配置したいくつかのコーナーを用意した。その結果、子どもたちは、多様な素材を、特色のあるいくつかのコーナーに配置することで、自分が打ち込める場を見つけ、その中で、自分なりの活動を楽しむことができた。素材は子どもたちにとって大きな刺激剤となり、子どもの遊びの展開を促すことが分かった。また、大人も子どもの喜びに誘発され、方向性を見いだしていくことが分かった。また、子どもの活発な様子を共有することで、大学や大学附属幼稚園での豊かな素材活用や素材収集の活動が活性化されるという方向性を見いだすことができた。また、将来的には、子どもたちの喜びを分かち合うことで、大学、地域、幼稚園の素材を通じた協力・連携が可能ではないかという示唆が与えられた。

キーワード：素材活用，幼稚園，子どもの遊び，インクルーシブ保育，大学の役割

1. はじめに

1.1 絵本作りの研究からの本研究へ

本研究者は、日頃から子どもたちが自分の力を十分に発揮できる保育を目指してきた。その一環として、絵本作りの実践と研究を行っている。2012年には、植草学園大学附属弁天幼稚園と植草弁天保育園の年長児^{注1)}による絵本作りを実施した。親や学生^{注2)}の支援による絵本作りをすることで、子どもたちは生き生きとし、親や学生との関わりを楽しみ、充実感を得た様子であった。植草他(2013)は、絵本作りには、自己に対する気づきや、物語を展開させる楽しさがあり、他の活動には見られない発見や人との深い関わりを生み出す力があることがわかった¹⁾。しかし、内容の分析をするとともに素材がどのように活用されたかを検討した結果、子どもは、様々な素材に接する経験が少ないという結論を得た。

そこで本研究者が以前から取り組んできた絵本作

りで、新たな素材を使う試みを行った。それは、絵本の表紙を服で包み、お話の内容にそった写真をコピーしてコラージュしていく活動で、絵本作りの導入的な手法の一つとして行った。その結果、いろいろな素材が絵本作りの発想を広げたことが分かった。さらに、素材を提供する大人(親や学生)が関わると、今までになかった豊かな表現が生み出された。大人によって示された素材から子どもは、イメージをふくらませることが出来たのである。身近な大人が、子に合った素材を提供すれば、子どもの発想が豊かになり、お話作りが展開しやすくなる。身近な大人でなくては準備できない子どもの服の写真、お絵かき作品のコピーなどが、子どもの心を刺激するのである。生き生きとした保育を築く上で、子どもをよく知る大人の素材提供が重要であると実感した。

[1] 著者連絡先：植草 一世

1.2 創造的リサイクルセンター（イタリア レッジョ・エミリア、レミダ『REMIDA』）の取り組み

本研究者は、2014年11月に北イタリアのレッジョ・エミリア市の保育の視察研修に参加した際、レミダという「創造的素材リサイクルセンター」で、素材が果たす役割について大きな示唆を得たばかりでなく、子どもの表現活動を支えるために街をあげて素材の収集を行う方法に感銘を受けた。

そこでは、レッジョ・エミリアアプローチと呼ばれる子どもの個性や創造性を重視した保育が行われている。その取り組みは、戦後まもなく地域の共同保育運動として始まり、現在では世界的に注目されている。

レミダは、レッジョ・チルドレン『Amici di Reggio Children』という非営利の教育団体の中枢のひとつで、創造的リサイクルセンターと呼ばれている。レミダは、市内の地域の商店や工場等で使われなくなった資源を回収整理し、子どもたちの表現活動に使えるような素材を、保育・教育の場に供給するシステムを作っている。

そこで集められるリサイクル品は、商店や工場にとっては半端物や使い古された品である。しかし、レミダに置かれたそれらは清潔に管理され、室内は美しい配色で整理され、楽しい創造の世界の始まりを感じさせる空間となっていた。そこには、様々な材質の紙や布、ビニールクロス、プラスチック、木やガラス、機械部品やボタンやビーズ、透明なボトル、糸やひも等、ありとあらゆる素材がある。それらの素材を見学しているだけでも、心が高揚した。レッジョ・エミリアの子どもたちの美しいアートは、これらの素材提供なしには生まれないと報告には納得できるものがあった。ここには、保育、教育の専門家やアトリエリスタと呼ばれるアートの専門家だった人達が配置され、素材提供するだけではなく、子どもたちの成果を見ながら、良い素材を提供するための研鑽や研修を行っているのである。このような素材に対する取り組みについても、大きな示唆が得られた。

2. 植草学園大学附属美浜幼稚園（以下、美浜幼稚園と示す）について

2.1 実践研究の場としての大学の附属幼稚園

植草学園では、1972年に、幼稚園教諭及び保育士を育成する植草幼児教育専門学校の同附属幼稚園、さらに、1977年には、附属第二幼稚園を開園した。それらの園は、2008年に植草学園大学が開学したことで同附属弁天幼稚園・美浜幼稚園（写真1）と改名され、大学附属幼稚園となった。以来、植草学園大学（以下、大学と示す）、植草学園短期大学の共同研究である「インクルーシブ保育の充実をもたらす促進要因に関する実践的研究」（2010、2011、植草学園大学共同研究、太田俊己ら）、「幼稚園教育が直面する複合課題に関する共同研究」（2012、2013、植草学園大学共同研究、太田俊己ら）等の、実践研究の場を提供してきた。平成27年度は、大学に所属する本研究者が美浜幼稚園副園長に就任したこともあり、保育者が意識的に保育の質を高める機会となるように、自由遊びを豊かにするための話し合いや研修を行い、「素材を意識した自由遊び（以下、コーナー遊びと記す）」を行うことにした。学年や学級を超えて、異年齢で自由に交流できるコーナー遊びの実行に向けての振り返り等、前期（4月～8月）に、10回以上の園内研修を行い実行していった。また、この期間に4回（2名ずつ）園外研修（他園の参観）^{注3)}を行った。それは、本研究者を含めた保育者たちの保育に対する「視点」の確認作業であった。



写真1 美浜幼稚園

2.2 「インクルーシブ保育」を目標とする

大学附属幼稚園となって以来、インクルーシブ保育を意識し目指してきた。それは、障害のある子、

気になる子、外国籍等を持ち言葉や文化の違いがある子どもたちを含めた保育である。これまで大学と共同研究という形を取りながら太田俊己氏をはじめ専門の教授等のアドバイスを受けてきた。そして本年度からは、「植草学園大学・植草学園短期大学特別支援研究センター」に、コーディネーターの派遣を要請し、元植草学園大学教授、愛隣幼稚園理事長である木下勝世氏の指導を得ることとなった。2015年6月29日の園内研修で、木下氏とともに、美浜幼稚園の「インクルーシブ保育の中で実践」について具体的な指導を得て、保育者全員で、これからの保育の内容を確認していった。

2.3 美浜幼稚園における保育の視点

インクルーシブ保育を行うにあたって、素材を活かし個人と集団を大切にす保育の「子ども主体となる子どもの活動」を基本にすえた。その視点を、①子どもの発達にふさわしい活動、②よろこんで取り組める活動（心情）、③自発的に取り組める活動（意欲）、④熱心に一生懸命取り組める活動（態度）、⑤安定した情緒のもとで行う。の5項目とした。それは安心安全な環境の中で他児とのつながりを持つことを大切にす保育である。以上をまとめると、(図1)のようになるだろう。

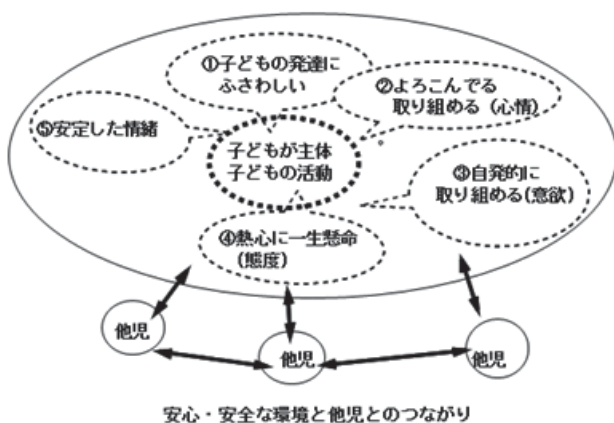


図1 子どもが主体的に取り組める保育の視点

2.4 素材の部屋「アトリエ」について (写真2)

インクルーシブ保育を実現するために、様々な発達段階にある個性を持った子どもたちが「自発的に取り組める遊び」を行える方法を考えた。その結果「多様な素材が活用できる環境作り」をすることに

した。つまり、様々な素材で満たされた異空間を充実させることで、どの子どもも何かの遊びには興味が持て、主体的に遊べるだろうと考えたのである。具体的には、空き部屋を利用して「アトリエ」(素材の部屋)を作った。その部屋は、子どもたちが自由に素材に触れ、遊びに活用できるように、1階の真ん中の部屋をあてることにした。保育者が棚を準備し、紙や牛乳パックの空き箱やビーズ等を棚に整理することから始めた。さらに保護者の協力を得て素材が集まるようになった。



写真2 アトリエ(素材庫)

3. 目的

どの子どもも主体的に遊べることを目指した「インクルーシブ保育」の実現のために、様々な素材を配置したいいくつかのコーナーを用意した。実際に子どもたちが、素材に誘発されて遊びをいかに展開させたのかを見ることで素材の重要性を確認するとともに、どのような素材の活用の仕方が良いのかを見いだすことを目的とする。仮説としては、多様な素材を、特色のあるいくつかのコーナーに配置することで、どの子どもも打ち込める場を見つけ、その中で自分なりの活動を楽しめるようになるであろうと考えた。また、このような保育を行う中で大学の役割や、大学附属幼稚園での豊かな素材活用や素材収集の方法にどのように影響するかを考察する。

4. 方法

4.1 素材活用に関する研究

①研究対象：美浜幼稚園の園児 年少児(31名)、年中児(26名)、年長児(36名)、計(93名)、保育者(12名)

②研究場所：美浜幼稚園

③研究期間：2015年4月～8月

④対象となるコーナー遊び（準備と日時等）：保育者達は、普段の自由遊びのマンネリ化を避けることを意識的に考えて、コーナー遊びを準備した。保育者側の事前準備として、すでにある素材を整理して子ども達が自由に活用しやすいように配置等を工夫した。また、あらたに子ども達の遊びに必要で喜びそうな素材を保育者が集め用意した。

コーナー遊びについての具体的な準備では、普段の子どもたちの興味関心の高い扱いやすい素材を想定して環境設定を行い、次の10の素材を中心にコーナーを構想し、配置図を作った（図2）。園庭には①大型段ボールとすのこ、②砂と水、③白線とゴザとコーンや自転車、④色水と和紙、⑤総合遊具・固定遊具（滑り台・登り棒・ブランコ）、室内には、⑥小麦粉粘土、⑦ぬりえ、⑧絵の具とタンポ、⑨ビーズや紙と空き箱、空き容器等、⑩おもちゃ、パズル等である。これらは、子どもの主体性を尊重するため、遊びを予想して素材を配置した（アンダーラインが新素材。また、アトリエを含んだ各保育室にはいつものおもちゃで遊べるようになっている）。⑤観察抽出日：6月3日（金）と6月26日（金）を設定する（子ども達が園に慣れ落ち着く6月の午前にコーナー遊びと、変化を見るため、ほぼ3週間を空けて設定した）。時間は10時から11時を特に抽出する。

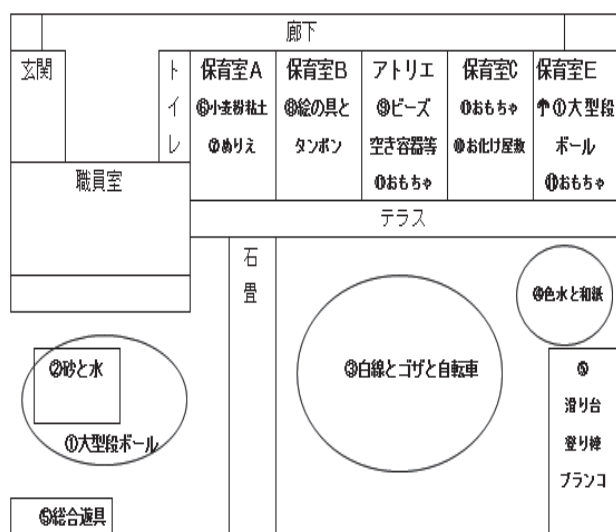


図2 コーナー遊び、場のイメージ図

⑥研究方法：2回のコーナー遊びを中心に、子どもと遊びの展開の様子を記録（ビデオ、写真）し、それを保育後園内研修で見て確認をする。保育者各自の記録（保育者の筆記による観察記録）は、1）普段にはない素材があることで、遊びがどう発展したか。2）特色あるコーナーがいくつか存在することで、自分の興味にあった好きな遊びを見つけ、どの子ども生き生きとできたかどうか。3）各コーナーでの遊びが充実することで遊びが、コーナーを越え発展し、みんなが繋がるようになったかどうか、という観点から考察する。本研究では特に「どの子ども主体的に遊びに取り組める」面と「主体的活動に寄与する保育者による素材の提供」面を統合した「環境と素材を活かした活動」と「子どもの遊びが生き生きとするための素材活用」とした。

4.2 大学の役割と素材収集についての展望

幼稚園での豊かな素材を活用する保育が、大人（保護者や保育者・学生）に与える影響について検討し、大学の関わりやそのあり方、素材集めの方法を考察する。

5. 結果

5.1 素材活用に関する研究

5.1.1 全体的結果

- ①結果1：新しい素材に触発されて、一人ひとりが遊びを楽しむことができた。
- ②結果2：遊びが深まり、展開し、影響し合う子どもたちの姿がみられた。
- ③結果3：他の遊びとの結びつきを強めていった。
- ④結果4：一人ひとりが楽しむ中で遊びに打ち込み、それぞれの特性を伸ばすことができた。個々の違いを前提にしながら協力し、みんなで楽しむ活動が見られた。

5.1.2 素材活用とコーナー遊び

各コーナーの展開を図3にまとめた。

①「大型段ボールとすのこ」（写真3）

・1回目のコーナー遊びでは、幼稚園の砂場近くに置かれた大型段ボールとすのこは、子どもたち（全学年）にとって目新しい素材であった。子どもたちは、早速、巨大な段ボールを立てて壁を作り始め、

素材と場所	遊びの展開 1回目(6月3日)	2回目(6月26日・小麦粉は7月3日)
①大型段ボールとすのこ(園庭)	・壁作りから家作り、大工遊び(窓やドア→風呂)	・家作り(テーブルとイス→窓にカーテン→階段→屋根→テレビ、リモコン、時計、電話、ドアチャイム、壁の本棚や模様)・「三匹のこぶた」ごっこ
②砂と水(園庭)	・水遊び(シロップ屋さん)	・水遊び泥遊び→風呂作り(おうちごっこ場の共有)
③白線とゴザとコーンと自転車(園庭)	・自転車のサーキット ・段ボールの電車遊び	・サーキット(ルール決め)
④色水と和紙(園庭)	・和紙の色染め→洗濯物干し→色水遊び	・色水遊び ・和紙の造形遊び
⑤固定遊具(園庭)	・ブランコ・総合遊具・登り棒	・ブランコ・総合遊具・登り棒
⑥小麦粉粘度遊び・小麦粉粘土作り(保育室A)	・感触を楽しむ→伸ばす・たたきつける・クッキーや動物作り	・小麦粉粘土作り→感触を楽しむ・作品作り
⑦ぬりえ(保育室A)	・動物、車、キャラクターもの、曼荼羅等、種類いろいろ)	・大きい小さい塗り絵を準備(1回目より丁寧に細かく)
⑧絵の具とタンポと筆(保育室B)	・スタンプ・模様遊び	・アトリエの素材遊びと合流
⑨ビーズと紙と空き箱と空き容器等(アトリエ)→(保育室C)	・ビーズでアクセサリ作り ・造形遊び	・造形遊び・魚釣りコーナーへ ・お化け作り→お化けコーナーへ *様々な展開
⑩いつものおもちゃ(アトリエ・各保育室)	・ままごと、おもちゃ遊び ・ごろごろ	・ままごと、おもちゃ遊び ・ごろごろ

図3 素材と遊びの展開図

窓やドアを作り、「家」のイメージを共有し始めた。しだいに多くの子どもたちが集まった。すのこにマーカーやビニールテープでデザインして大工のような遊びが広がった。(結果1)

・2回目には、前回作った段ボールの家に加えて、保育者が簡単な段ボールのテーブルや椅子や素材(写真4)を用意しておいた。布(はぎれ)、画用紙、クレヨンテーブルと椅子で、それぞれに遊び始めた年長・年中児は、絵本『11ぴきのねこのうち』を見ながら、窓を作り、布でカーテンを付け、階段を作り、隣にあった総合遊具の滑り台にも段ボールで屋根を付けたことで、コーナーを越えた遊びに発展し、みんなが繋がるようになった。(結果2)

・外側の家の雰囲気だけでなく、家の中も画用紙で、



写真3 大型段ボール



写真4 園庭の素材

テレビ、リモコン、時計、電話、ドアチャイムを作って貼り、壁に油性マジックで本棚を描いたりした。年長女児が「三匹のこぶた」のこぶたになると衣装を作り、ごっこ遊びに発展した。(結果2, 3)

②「砂と水」

・1回目は、いつものように年長児が大きなバケツで、年中少児は牛乳のあき容器等の思い思いの入れ物に水を汲んで砂場に運び、ままごとやシロップ作りから氷屋が始まった。山作りの年少・中・長児の子どもたちは、砂場に水をためたが、しみ込みこんでしまうため、近くにあった段ボール(新素材)を使って砂の上に敷き水をためた。水がたまっていく様子が面白く何度も水道と砂場をいききしていた。(結果1)

・2回目は、水遊び、泥遊びが盛んに行われ、隣の「大型段ボール」のお家ごっこ繋がり、砂場にお風呂を作るという形で、場が共有された。(結果2, 3)

③「白線とゴザとコーン」(写真5)

・1回目から好きな自転車で遊ぶ年長児は、白線やコーンに誘発されサーキットを想定したスピード勝負を行った。ころんで擦り傷程度の怪我をするハプニングがあったが、声をかけ合いながら熱中して遊びを続けた。コーンは駐車場、ゴザはサービスエリアになった。(結果1)

・年少児が年長児のサーキットを見て「電車を走らせたい」と言ったことをヒントにして、保育者が段ボールで一人用の電車を作ったら、うれしそうに、しばらくサーキットの線を線路に見立てて遊んでい



写真5 サークット

た。そこから年長児と白線を共有して遊ぶことになった。他の年少児も乗りたがり、2人で無理して乗っていたので、保育者が「順番にしたら」と声をかける。年少児の二人でゴザを駅に見立て「待ってまーす」と座って待ち、交代することをくりかえし遊んでいた。(結果2, 3)

④「色水と和紙」(写真6)

・1回目は、6色の色水で染め紙遊びとなった。年長児を中心に色水に興味を示したので、保育者が和紙に絵の具をつけて見せると、子どもたちは真似て紙染めを始めた。障子紙が色水を吸うスピードに驚いたり、開いた時のきれいな模様感動したりしていた。色々な方法で染めた後、園庭の木々のロープに「洗濯物」と言って、和紙を干す姿が見られた。(結果1)

・2回目以後の色水は保育者が用意したのではなく、年長児を中心にアトリエから絵の具を持ち出して、自発的に作って遊ぶようになった。染めた和紙は、アトリエで折り紙や造形遊びに活用するようになった。(結果3)

⑤「総合遊具・固定遊具(滑り台・登り棒・ブラン

コ等)」総合遊具は、写真3の後方の幼稚園園庭に設置されているはしごや滑り台等の複合的な遊具である(以下、総合遊具と記す)。固定遊具とは、ここでは、滑り台・登り棒・ブランコ等を言う。

・1, 2回とも幼稚園の園庭にある定番の総合遊具・固定遊具には、年中児の数人の子どもたちが、ブランコをこぐ姿や滑り台であそぶ姿があった。また、登り棒に挑戦して登れるようになり保育者と共に喜び合う姿があった。(結果2)

⑥「小麦粉粘土」(写真7)

・1回目は、年少児を意識したコーナーであったが、実際には年中長児が集まった。すぐに身体全体で粘土をこね、机に叩きつけるダイナミックな遊びとなった。次第に、年少・中児も集まり、感触を楽しむ、小麦粉の香りを楽しむ、いろいろな形を作る、型抜きやストロー、プリンカップの素材を使ってお菓子やケーキのイメージを膨らませて作る等、様々な遊びとなった。年齢によって遊び方が異なっていた。できた作品は作品置き場に並べ、子どもたち同士で喜んでいた。(結果1)

・2回目は、小麦粉粘土作りである。年少児も参加していたが、小麦粉粘土を一人で完成させることは難しく、保育者に手伝ってもらい粘土状になった小麦粉粘土の感触や、こねる楽しさを味わっていた。小麦粉粘土は、子どもにとって新鮮な素材であった。年少児担任が3才児の発達を意識して用意した素材に、新しもの好きな年長児が興味を示した。個々の違いを前提にしながら協力し、みんなで楽しむことに有効であった。(結果2)

⑦「ぬりえ」

・1回目は、年長児は曼荼羅、年中少は車や動物やキャラクターの塗り絵に興味をもった。子どもの発



写真6 色水と和紙



写真7 小麦粉粘土

達や興味関心を知る機会となった。3才児は、友だちと同じものを使いたがる時期なので、塗り絵の種類は少なくして枚数を多めに用意する必要を感じた。繊細に色塗りが出来る色鉛筆が人気だった。描画材選びも大切であることに気づく。鉛筆削りも自分で使えるので用意しておく必要を感じた。(結果1)

・2回目には、年中児は、キャラクターのぬりえの周りを切りとるなど、絵人形を作り始め、友達と遊んでいた。年少児は、小さい紙のぬりえを何枚も色を変えて楽しんでいた。明らかに前回よりも丁寧にぬりえをしていた。(結果2)

⑧「絵の具とタンポと筆」

・6色の絵の具とそれぞれの専用のタンポで、年長児は、自分の好きな色を次々に選び紙に押し去っていった。タンポを使っている子がいると、順番を守り終わるのを待っていた。年長児が年少児にやり方を教える姿が見られた。年中児は、1色好きな色を紙全体にまんべんなく押し去って満足していた。(結果1)

・年中児が最後まで残り、絵の具が乾くまで別の紙にスタンプをしながら待ち、少し乾くとハサミで切って、アトリエから、トイレットペーパーの芯やエアパッキンのスタンプも出し作品作りに打ち込んだ。年少児が様子をじっと観察していたので「やってみる？」と声をかけると4、5枚の紙をまとめて使って色とりどりの、スタンプングを楽しんだ。年少児は、スタンプングを重ね、タンポを筆のようにしてのばして楽しむうちに色が混ざりはじめた。「みて～」とうれしそうに言っていた。年長児は、年少児の様子を見て、「混ぜるのも面白そう！」と、タンポを押し「いい色だね」と混ざった色のグラデーションを楽しんでいた。タンポと他のスタンプを組み合わせてアレンジもしていた。(結果2, 3)

⑨「ビーズと紙と空き箱と空き容器等」(写真8, 9)

・1回目は、ままごとコーナーやヒーローごっこの子どもたちが、空き箱や輪ゴムを使ってベルトを作り、他のコーナーに戻っていく。(結果1)

・子どもたちが、クッキー屋さんをやりたいと言っていたので、アトリエの木の積み木と板を利用して、テラスで行うことになった。戸外のコーナーで遊んでいた子たちがお客さんになり、交流をもつことができた。(結果3, 4)

・年中長がビーズ、年少児がストローを切ったもの



写真8 アトリエ



写真9 おばけやしき

を主に使ってひも通しをして、アクセサリ作りを始めた。また、色画用紙にクレヨンで絵を描き、出来た作品を磁石で黒板に飾っていった。(結果1)

・2回目は、アトリエにある透明タッパーやティッシュの空き箱などを使って、いろいろなおばけを作り始めた。後半には、カラーポリ袋を服に見立て、自分自身がおばけになる方向へと発展した。アトリエの一角に保育者が「おばけやしき」の看板や暗幕で暗いコーナーを作ったことで、さらに子どもたちは、お化けを作って飾り、おばけ屋敷になっていった。子どもたちはおばけ屋敷の雰囲気喜び、「カップおばけ」を作っていた。(結果2)

・年長児が率先してアイデアを出して作り、その様子を年少中児が見て刺激を受けて真似したり、教えてもらったりする関わりが多く見られた。そのような年少中児を年長児が自然と助ける姿も印象的だった。その後お化け屋敷は、アトリエから独立して、別の一部屋に移動し展開していった。(結果2, 3)

⑩「いつものおもちゃ」(写真10)

各保育室には、いつものおもちゃがある。子ども

たちが、ままごとやパズル等を楽しむ姿も観察された。年中A児は自分の好きな場所であるアトリエの隅の布で囲まれたマットに転がって、木でできたドミノを使ってピタゴラ装置を作って遊んでいた。友だちが遊びの中に入ってくるとやめてしまう。また、友だちが離れると再度始める様子が見られる。いつもは一人で過ごしているが、コーナーの中から、外の友だちに話しかけたり、遊びを真似してみたりする姿が見られた。(結果1, 2, 4)



写真10 いつものおもちゃ

5.2 発展の仕方から見た遊び

①結果1：新しい素材に触発されて、一人ひとりが遊びを楽しむことができた。

・各コーナー全てにおいて多様な素材が、だれでも何らかの活動に参加できる場を提供した。素材に誘発され、さらに遊びが展開した。普段ない素材には、新しいものが好きな子どもたちが集まり、新たなアイデアを次々と生み出し、遊びを展開させることが出来た。

・大型段ボールでは、お家作りが行われた。保育者が用意した「11ぴきのねこのおうち」から出発して、「三匹のこぶた」のごっこ遊びが現れたのは、そのお話を子どもたち自身が共有できたためである。

・色水は、普段園庭にはない素材である。子どもたちは、和紙を丁寧に折り染める、クシャクシャに丸める、開いたまま染める、はさみで切り込みを入れる等、遊び方に子どもたちの工夫が見られるようになった。素材が変化することに喜び、さらに素材に関わり変化させていった事例である。

②結果2：遊びが深まり、展開し、影響し合う子どもたちの姿がみられた。

・慣れた遊びをする子どもたちも、周りの活発に遊ぶ仲間に影響されたことが観察された。登り棒に挑戦して「登れるようになり保育者と喜び合う姿」からは、むしろ固定遊具（登り棒、ブランコ）そのものの遊びが深まったと考える。

・さらに、いつもの遊びから普段とは違う遊びへと発展していった。子どもたちは、自分の好きな遊びに取り組んだが、同時並行的に展開する遊びに触発されて、総合遊具等のいつもの遊びも、他の遊びとの結びつきを強めていった。一緒に遊んでいるという一体感が得られた。

・いつもの園庭の遊びに、大きな白線の素材があることで、子どもが自由に遊びを展開させていった。円が描かれ、ゴザやコーンが準備された。年長中児は、自転車サーキットをし、その遊びにあこがれた年少児は、保育者に助けられ、段ボールの電車で参加した。年齢にあったそれぞれの遊びで場が共有された。ひとつの白線やゴザが、サーキット、サービスエリア、駅に見立てられて「順番」を待ち運転手や乗客の「役割」が決められ、ルールとして共通理解されていく様子が観察されたことは意味深い。

・絵の具とタンポのコーナーでは、子どもたちの様子に、年齢差が観察された。年長児は年少児に教えるという縦割りの交流が多く見られたコーナーだった。発展することを予測してクレヨンなども用意したが絵の具が乾かないと次に進めない。子どもたちは乾くまで他のコーナーに行き、器用に時間を活用していた。子どもたちに遊び方を任せることも、コーナーならできることであろう。

③結果3：他の遊びとの結びつきを強めていった。

・砂と水は、お家ごっこと繋がって場が共有され、いつもの砂遊びに新たな展開が見られた。総合遊具・固定遊具は、いつもの遊びに見えても、登り棒に挑戦し達成する子どもなど、新たな形で遊ぶ姿が見られた。他の素材がたくさんあることで、総合遊具・固定遊具（滑り台・登り棒・ブランコ等）の役割が鮮明に打ち出されたと考える。保育者は素材を提供する役割だけでなく、励ましの言葉掛けや補助等、さりげない援助もしていた。

・みんなが楽しめ、さらに、一人ひとりが楽しむ中

で、お互いの結びつきが生まれてきた。個々の違いを前提にしながら協力し、みんなで楽しむという視野の広がりが見られた。

・アトリエの部屋では、子どもたちがとても集中して遊んでいる。「普段落ち着きのないと思っていた子の意外な一面を見ることができた」や「子どもの創造力と展開力が発揮されるには素材の豊富さが大切だということを感じた」と、保育者の記述があるように、落ち着いた製作の部屋となってきた。その一方で、遊びの展開や他のコーナーとの関連で盛り上がりを見せ始めた「お化け作り」は、保育室Cに「お化け屋敷」としてコーナーが独立していった。子どもの遊びの展開を見て、場を提供することこそ保育者の役割であることが確認された。

④結果4：一人ひとりが楽しむ中で遊びに打ち込み、それぞれの特性を伸ばすことができた。個々の違いを前提にしながら協力し、みんなで楽しむ活動が見られた。

・活動が遅れがちなA児については、仲間同士で声を掛けたり、手を引いたり、気遣う行動や優しく接する様子が見られるようになってきたので、担任としては、「少しでもクラスの仲間の一員として一緒に活動してもらいたいと願う」と報告があった。それについて、専門コーディネーターの指導を受け、保育者間の共通理解をはかり、彼の動きながらの行動や話の聴き方を認めてあげてを申し合わせた。A児にとって集団は苦手であることを認め、A児の自由な行動を認めながら得意な部分を伸ばしていくことを確認していった。今回のコーナー遊びでは、アトリエの一角がA児にとって、過ごしやすい環境である上に、他児とのまじわりができた場ともなった。今後のインクルーシブ保育の手がかりとなったといえる。

5.3 子どもの遊びに触発された大人

多様な素材のあるコーナーで遊びをする子どもの姿に保育者も触発され、様々なアイデアが生み出された。例えば、小麦粉粘土の感触を楽しむ子どもたちの姿を見た保育者は、子ども自身で作れるよう教材研究をしたり、アトリエの素材に喜ぶ子どもたちを見た保育者は、遊びが展開するようにお化け屋敷を独立させる部屋を用意したり、園庭に段ボール

や布や白線やコーンを増やしていった。

また、小麦粉粘土のような準備に手間のかかる素材は、材料や分量について、時間をかけて教材研究を行なう必要がある。幼稚園と平行して教材研究を、本研究者の大学のゼミ生が行った。その結果「紙コップに50gの小麦粉を入れ、色水は、ペットボトルのキャップ4杯(3cc)を粘土に入れ、割り箸で混ぜ、固まってきたら手でこねることがよりよい」ことが分かった。実際にそれをヒントとして行くと、手にベタベタとついてしまい、温度等の環境の違いからか、うまくいかなかった。保育者が小麦粉を足すと固まると伝え、子どもたちは粘土状になるように一生懸命こねていた。素材の作り方や手順等を、大学と共に行うことは、学生や現場にとっても相互にとって刺激となるという意義がある。インクルーシブ保育に向けた素材研究を大学と行うことは、必要なことである。

それに応えるように、保護者もアトリエの素材を集めた。子どもたちの遊びを見て、刺激された保護者が豊富な素材を用意することの大切さに気づき始めたと言える。

6. 考察

6.1 保育における素材の意味

保育における素材は、子どもの個性に合った、子どもが扱える様々な素材が必要となる。それは、幼稚園教育要領^{注4)}や保育所保育指針^{注5)}の第1章総則が示すように、保育は環境を通して行うものであるとすれば、子どもが健やかに育成される環境のためには、素材は大切な要素となるのである。保育の場に、多くの素材(総合遊具・固定遊具も含めて)があることは、子ども達にとって環境そのものが豊かになることを意味する。また、子どもにとって「豊富な素材」とは、子どもの心を引きつける要素を含んだ素材が沢山あることと言えるだろう。そのためには素材を沢山を沢山集める大切と必要が生じる。今後はさらに子どもにとって興味関心を引く素材とは何か、研究を重ね、素材そのものについての研究が必要となる。

6.2 インクルーシブ保育を促す素材

アトリエの多様な素材が、子どもたちに何らかの活動に参加できる場を提供した。子どもたちは、自由に材料を出して作っていた。そこは、さまざまな遊びの拠点となった。普段ない素材には、新しいものが好きな子どもたちが集まり、新たなアイデアを次々と生み出し、遊びを展開させることが出来た。一方、慣れた遊びをする子どもたちも、周りの環境に刺激されて、普段とは違う遊びへと発展させる。子どもたちは、自分の好きな遊びに取り組んだが、同時並行的に展開する遊びに触発されて、他の遊びとの結びつきを強め、一緒に遊んでいるという一体感が得られた。素材は子どもの遊びの刺激剤として多くの影響を与えているといえる。

一人一人の特性を尊重した場の提供ができたことは、インクルーシブ保育を促すために素材が有効であったといえる。

6.3 大学での素材研究の展望

6.3.1 保育者の学び

子どもたちの素材に対する遊びの姿から、保育者は刺激を受け、豊富な素材を用意することの大切さに気づいた。豊富な素材を用意することで子どもの遊びが活発化し、豊富な素材を用意することの重要性を改めて意識したのである。このことは、大学での素材研究にも活かされるだろう。つまり、豊富な素材が子どもたちに与えた影響を深く知ることは、学生も素材の豊富さの重要性に気づき、自分たちで工夫して、豊富な材料を用意する気持ちをふくらませることになると思われる。

6.3.2 地域との連携

子どもたちの素材活用に、保護者（地域の人々）の協力を求めることは、大人達が単に素材を提供するだけでなく、自分たちの提供した素材によって子どもたちが生き生きとする姿を知ることにつながる。もっと子どもたちのために素材を工夫し、提供しようという気持ちを生み出すためには、幼稚園で行われた子どもたちの遊びや作品を保護者（地域の人々）に報告、発表する必要がある。

6.3.3 協力のためのサイクルを作る

子どもの素材活用のためには、大学や地域と連携し、さらに素材収集のサイクルを作ることが大切で

ある。大学は、子どもたちの感動にもとづいて、子どもたちのために素材を研究し用意する役割を担う。地域の人たちは、子どものための素材を提供する。幼稚園では、子どもたちが生き生きと遊んだ結果を大学や地域で発表し、地域社会の理解や感動をさらに深める。このサイクルは、子どもの感動だけではなく、大学、地域の感動を生み出し、地域、大学を巻き込んだ素材を活用したインクルーシブ保育をみんなで支えるという意識につながると確信する。

7. 今後の構想

素材集めのサイクル（アトリエ・リーフ）の構想（図4）は、保育現場だけのことではなく、大学の学生を巻き込んだ「学生の創作活動」「教員の授業」「附属幼稚園、保育園のこどもたちの遊び」へとつながっていくことが望ましい。さらに、地域や子どもたち自身でも集め、自由に使用、利用できる素材庫（仮称：アトリエ・リーフ）作りへと発展させるためには、大人たちが子どもの育ちを継続的に考えられる具体的な行動や流れが必要である。

素材は子どもたちにとって大きな刺激剤となり、子どもの遊びを展開させていくことが分かった。また、大人も子どもの喜びに誘発され、方向性を見いだしていくことが分かった。確かに、教材研究や収集は手間が掛かるが、子どもの様子を知ることで、大人が方向性を見いだせば、普段から素材収集に意識するようになるだろう。小麦の粘土や和紙染めのように、教材研究や準備に時間を要する素材は、大学の学生（植草ゼミ）が実際に行い、情報を共有した。まだ、試みの段階であるが、このような取り組みが出来る事が望ましいと考える。

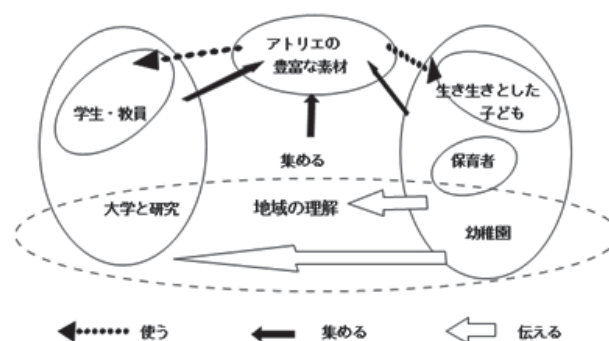


図4 素材集めのサイクル（アトリエ・リーフ）の構想

倫理的配慮：個人情報に記載されないように配慮しました。

8. おわりに

子どもの年齢によって、素材とのかかわり方や、それを通した仲間との交流、保育者の援助等、今後の課題として取り組んでいきたい。

9. 謝辞

本研究を進めるにあたり、美浜幼稚園の園児の皆様、保護者の皆様には、多大なご協力を得ました。また、保育のご指導をいただきました太田俊己先生、木下勝世先生ありがとうございました。園内研修に参加していただいた植草学園大学、短大の先生方、園外研修でお世話になりました葛飾こどもの園幼稚園、たちばな保育園の先生方、明德習志野保育園の先生方、ご協力ありがとうございました。原稿執筆にあたりましては、粘り強くご指導をしていただき

ました安藤則夫先生、本当にありがとうございました。最後になりましたが、新米副園長に付き合ってくださいている美浜幼稚園教諭の皆様、心よりお礼申し上げます。記してここに感謝いたします。

10. 引用

- 1) 植草一世他. 芸術教育研究所芸術教育の会, 芸術教育. Vol. 92, 26-28

11. 注

- 1) 植草学園大学附属弁天幼稚園園児 (33名), 植草学園弁天保育園 (3名)
- 2) 1) の親と植草学園大学発達教育学部3, 4年生 (36名)
- 3) 葛飾子どもの園幼稚園, たちばな保育園
- 4) 文部科学省, 幼稚園教育要領, 文部科学省告示第26号, 2008
- 5) 厚生労働省, 保育所保育指針, 厚生労働省告示141号, 2008

Efforts to Raise the Quality of Childcare at a University-affiliated Kindergarten: The study about the useful application of materials for enhancing children's playing.

Kazuyo UEKUSA^[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University,
University-affiliated kindergarten, Mihama

This paper outlines research on the potential for certain daily-used materials to realize effective, inclusive education for young children. Our hypothesis was that an abundant variety of daily-used materials would provide every child, with or without disabilities, with a good chance to play, making it easy to participate in and enjoy activities with other children, especially when they are distributed among several different kinds of separated play areas. We confirmed this hypothesis. We found each child was able to enjoy playing with his or her favorite materials in his or her favorite play area; each small play group was able to extend their favorite play space and interconnect with other play groups; each child was able to fully engage in the activity, enjoy it, and interrelate with other children. Teachers were also motivated by the activities and wanted to provide more abundant materials for their students. We considered the possibility that by sharing in the children's joy with the daily-used materials, students of the university, parents and people in the area study about and provide children with more of these appropriate materials, and that these activities could encourage their cooperation for gathering and providing such materials for children.

Keywords: useful application of materials, university-affiliated kindergarten, playing of young children, inclusive child care, the role of university

[1] Kazuyo UEKUSA